を包括した民間医療信仰についてはすでに各県別に多く出版されているが、兵庫県からのこれ等出版物はそれほど多くない。このような視点からも郷土史資料として価値を認め、かつ今後の研究に参考となり得る。また神戸病院の明治初期の写真や前述した人物像、その他数十点の資料を写真とし最後の項に、明治以前の兵庫出身の医師一覧表を載せ、今後の兵庫県医学人物史調査に恰好の資料を提供している。

著者は西宮史談会にも属され、西宮郷土史についても造形深く、多くの郷土史資料を参考にして記述されていることより特に関西在住の医史学、郷土史民俗学に関心ある者の必読の書である。

（奥沢　康正）

〔兵庫県医師会・神戸市中央区山手通り六―一―三〇、電話〇七八―三七一―四一一四、四六判二九三頁、三五〇〇円〕

フォス美弥子編訳『幕末出島未公開文書 ―ドンケル＝クルチウス覚え書』

一世紀半が過ぎてしまった今日に到っては、いささか皮肉な感じもするが、アメリカが初めて日本に関心を寄せたのは、当時急激に増加していた自国の捕鯨船団の保護が目的だった。日本近海で船が難破した際、乗組員が監禁され、長崎からの移送はオランダに委ねられていたためである。さらにはまた蒸気船の運行が発達し、東アジアでの補給基地を確保する必要性も増大していた。日本を如何に国際社会へ編入できるかは西洋諸国にとって緊急の課題となった。一八五二年浦賀沖へのペリー提督来航は、同様の「訪問」をする他の船の先駆けになっただけではない。それは徳川体制の崩壊状態を決定的なものとして、将来の対外関係をめぐる国中の激しい綱引きに少なからぬ影響を及ぼした。

米英露仏等列強の圧力の下で陥っていた分裂状態を生々しい描写によって裏付けたのは最後の出島商館長ヤン・ヘンドリク・ドンケル＝クルチウス〔Jan Hendrik Donker Curtius、一八一三―一八七九年〕であった。彼は西洋で唯一、それまで二世紀余りに亙って鎖国日本と直接交渉を維持してきた国の代表者として、アメリカなどが頼りがちであった砲艦政策よりも、ねばり強く双方の信頼関係を築く方が遙かに適切であると判断していた。そのために、彼は積極的にオランダ語の普及を促進し、西洋の学問、技術の導入を助成し、様々な啓蒙活動を行なった。同時にまたドンケル＝クルチウスが同時に日本の理解に努めていたことは、「日本文法稿本」〔Proeveener Japansche spraakkunst〕という形で結実した彼の日本語研究からもうかがわれる。およそ七年に及ぶ日本滞在で蒐集した数多くの書籍は現在主としてライデン大学に所蔵されている。

この度出版された本で紹介されている記事は編著者のフォス美弥子氏が植民省極秘文書の中から発見したものである。本の前書き（七頁）ではまず歴史的背景や資料について述べられ、続く本文は一八五二年（嘉永五年）の書簡及び一八五三年

（嘉永六年）から一八五五年（安政二年）までの四つの覚書集とそれぞれの添書から成り立っている。巻末には詳細な解説とドンケルの略歴があり、文献目録からは当時の諸問題を巡っての内外における研究の状況がうかがえる。人名、件名索引は綿密に作成され、それはおよそ一七〇ページにも及ぶ広範な資料への取り組みを容易にしている。冒頭には数枚の写真、版画などが載せられており、主要な登場人物とその舞台への「視覚的な接近」をも可能にしてくれる。

当時のことは歴史書や学術論文では通常大まかな骨格が粗描されているに過ぎない。本書では読者の眼前に繰り広げられた資料によって歴史との関わりを楽しくする肉付けがされている。ドンケルという人物を生き生きと描写し、商館と長崎当局との関係に見られる建て前と本音や、長崎湾に入港するロシア、イギリス、フランス艦隊の内部事情をも明らかにして、幕末の外交に対する理解を深めてくれる。医学史に興味を持つ読者なら、西洋医学や化学の紹介で著名なドクトール・ファン・デン・ブルック〔J. K. Van den Broek〕と本書で再会できることを嬉しく思うであろう。

筆者はこの本を一気に読んでしまった。丁寧な訳文に解説付きこの著作によるフォス氏の功績は大きい。「外圧」苦しめられている今日の日本を考える際にも、この本は様々な刺激を与えてくれるであろう。一読をお勧めしたい。

（ヴォルフガング・ミヒェル）

〔新人物往来社・東京都千代田区丸ノ内三―三―一新東京ビル、電話〇三―三二一二―三九三一、一九九二年、四六判総二二三ページ、定価四、八〇〇円〕

坂井建雄著『からだの自然誌』

著者は一九五三年生れ、一九七八年に東京大学医学部を卒業、臨床研修を受けずに、東京大学で解剖学を専攻され、現在順天堂大学医学部の解剖学教授である。人体解剖学を学生に教育指導され、腎臓と血管系の微細構造を機能的な側面から研究され、ドイツにおける比較解剖学の伝統あるハイデルベルク大学に留学され、解剖学のすべてが研究分野であるといわれ、若い研究者を指導されている。

本書の文章の中で「人体と細胞とがそれぞれ自律的に複製する明確な単位であるということを考えたとき、人体を中心とする生物学と細胞を中心とする生物学が、それぞれの目標に向かって進みながら、たがいに補充し合うという時代がまさに始まりつつあるように思える。人体の形態学と細胞の生物学はこれからの解剖学を支えるべき二つの柱である。と、又解剖学が扱う人間の身体はわれわれひとりひとりにとって、かけがえのない切実なものである。そして解剖学には、われわれが自然に対してどのように立ち向かい、自然科学という知の体系を導きだすことができるかという、本質的な問題が集約されている。解剖学は医学の中のもっとも古い分野であるが、人体という生命的な自然にとりくむ自然科学の最